

帰国子女の冠詞使用
— 「前提性」の理解と「心の理論」の観点から—

友田 路（東京大学大学院総合文化研究科）

【はじめに】

帰国子女 L2 研究において帰国後の L2 喪失が母語話者幼児・児童の言語獲得の習得順序と鏡像関係にあるとの仮説に関し、退行現象によって顕在化した帰国子女の L2 喪失や L2 誤用が、どのような手掛かりに依拠するかメタ言語的に明らかにするための横断的調査を実施した。

【先行研究】

従来の帰国子女の L2 喪失研究においては、発話中の不規則動詞の屈折や語彙数を根拠としてその著しい喪失を示唆しているが、動詞や名詞の誤用から細かい言語変化の推移まで見極めるのは極めて難しい。友田（2008）および Tomoda（2008）では動詞や名詞ではなく冠詞を採用して、より細かい言語変化を縦断的にとらえる可能性を探っている。簡単に習得出来る基本的文法ルールだけでは、実際の場面における冠詞の適切な選択は難しく、冠詞と共起する名詞句が、聞き手（他者）にとって既知か未知かという聞き手の「前提性」の理解を踏まえて初めて冠詞習得に近づくことが指摘されている（Chierchia, 1998; Tomasello, 2003 ほか）。また、こうした「前提性」の理解は、発達心理学の「心の理論」の獲得を判断するための「誤信念課題」においても、幼児の「物の見方」の基盤とされる概念としてよく知られている。さらに最近では「誤信念課題」は被験者の文化の違いや言語能力を認識する「心」を覗くツールであるという主張もある（Naito, 2003 ほか）。

【研究課題と方法】

先行研究を踏まえて本研究では帰国子女を対象として主に二つの調査を試みた。第一に、「冠詞使用の際、初出と既出など聞き手（他者）の『前提性』を理解しているか」を検証すべく、前述の Tomoda（2008）の追試を実施し冠詞使用の基本ルールの理解を穴埋め問題で測定した上で、Warden（1976）の追試実験を行い、4 コマ漫画を用いた「お話づくり」の手法を採用して冠詞使用を調査した。更に、Maratsos（1976）のリスニング課題で、その冠詞を用いた理由をメタ言語的に質問した。第二に、「L2 使用の負荷により聞き手（他

者)の『前提性』理解が正しく行われぬのか」を明らかにすべく、「誤信念課題」を採用した。L2で実施した「誤信念課題」を正答出来なかった場合は、タスク中の質問の意味(他者の前提性の理解の確認)を事実認識のためのクエスションと取り違えていないかを確認した上で、「誤信念課題」の別のタスクをL1で実施し、L2使用の負荷の有無(Tomiyama, 2008)を検証した。

被験者は、いずれも両親が日本人の財団法人海外子女教育振興財団の外国語保持教室に所属する帰国子女で、予備的実験の結果、メタ言語の説明が可能であった小学校4年生の帰国児童(33名)と、帰国後の正式な英語教育を通じて冠詞使用の基礎的な文法を明示的に教授済みの中学校1年生(26名)とした。

【結果と考察】

冠詞使用の基本的ルールに関する理解については、文法的な正確さの尺度(TLU値)が平均して小4が74.55、中1が78.95といずれも高く、L2語彙能力とも相関していることから、冠詞がL2能力を示す一つの指標として機能する可能性が示唆された。

第一の課題の最初の実験で行った「お話づくり」の結果は、小4も中1も主語の位置の誤用が多く(同一課題における平均誤用頻度は小4が4.58、中1が4.38)、主語以外の位置での誤用(同小4が1.88、中1が1.65)とは大きく異なる傾向を示した。この結果を踏まえて、主語の位置の冠詞誤用と出国年齢との関連を調べたが、当初予想とは異なり相関関係は見られなかった。しかしながら、小4の被験者は帰国後期間との相関が顕著($r=.519$)で、一方、中1の被験者は滞在年数と弱い負の相関($r=-.496$)があった。(いずれも1%水準で有意差あり)。換言すれば、小4の場合は帰国後の期間の長さがその冠詞使用の正確さを左右するが、中1の場合は、帰国後の中学受験のための勉強や帰国後の家庭におけるL2保持活動、また認知力そのものの向上など様々な外部要因が働くことから、帰国後よりもむしろ帰国前のL2能力を決定すると考えられる滞在期間の長さが冠詞使用の正確さを決定していると推測できる。更に、Maratsos(1976)のリスニング・タスクを用いたメタ言語的冠詞使用の調査の結果、冠詞の選択で正答した帰国子女においても、実際には社会的常識や社会通念、文化的に正しいとされるプロトコルに依拠した回答であったことが明らかとなり、L2の補完として他の手掛かりに依存することが確認された。

第二の課題で用いた誤信念課題の結果は、小4の60.61%、中1の53.85%しか正答出来なかったが、メタ言語的に誤答の理由を探った結果、L2の場合は登場人物の心理よりも事象の結果により注目している傾向が明らかとなった。L1を用いた誤信念課題では小4、中1ともに8割が正答を示した。誤信念課題のように易しいタスクをL1で正答出来てもL2で誤答してしまうケースの頻発から、帰国子女であってもL2使用の負荷は顕著であるこ

とが示唆された。

今後はこの結果を踏まえて、帰国子女の L2 喪失の阻止には何が有効であるか等、L2 保持方法の開発にも取り組みたい。

【参考文献】

- Chierchia, G. (1998). Reference to kinds across languages. *Natural Language Semantics*, 6, 339-405.
- Maratsos, M. P. (1976). *The use of definite and indefinite reference in young children: An experimental study of semantic acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Naito, M. (2003). The relationship between theory of mind and episodic memory: Evidence for the development of autothetic consciousness. *Journal of Experimental Child Psychology*, 85, 312-336.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge: Harvard University Press.
- Tomiyaama, M. (2008). Age and proficiency in L2 attrition: Data from two siblings. *Applied Linguistics*, 30(2), 253-275.
- Tomoda, M. (2008). Article usage in the language of Japanese returnee children. *Bulletin of Foreign Language Teaching Association, The University of Tokyo*, 64-83.
- Warden, D. A. (1976). The influence of context on children's use of identifying expressions and references. *British Journal of Psychology*, 67(1), 101-112.
- 友田 路 (2008). 「年少日本人帰国児童の冠詞使用－前提性と特定性の観点から－」『言語情報科学 vol.6』東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学, p. 227-246